

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00598

研究課題名(和文) 体験と知識の機能類型 - 日独語比較による基礎研究

研究課題名(英文) Functional Typology of Experience and Knowledge - a Basic Study through Japanese-German Comparison

研究代表者

小川 暁夫 (OGAWA, Akio)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：00204066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「体験」と「知識」をそれぞれに反映する、日独語に特徴的な諸構文に関して、両者の言語化の過程を実証的・理論的に明らかにし、「体験と知識の機能類型」の基礎研究を構築することである。

2018年にはコーパスによるデータベース化、分析を行い、2019年にはそれらの成果を単著「Grammatik der Bedeutungsstiftung(意味付与の文法)」として出版した。コロナ禍により学会発表の延期等が生じたが、2020年には『意味付与の原理』、『再帰構文再考』と題する論文の発表、日本独文学会での口頭発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツ語の与格構文とそれに機能的に対応する日本語の二重主語構文、被害受身文が主として体験に属し、それに対して、ドイツ語の中間構文(middle construction)と日本語の属性を表す構文が知識に対応することなどが明らかとなった。

このように言語個別性の解明と言語普遍性の発見を促進し、機能類型論を深化・発展させることを主眼としたが、これはGeorg von der Gabelentzによる言語の類型的視点に立脚し、それらの理論的背景を模索するものであり、日独語を対象として、これらの理論のさらなる実質化、および統合化を目指した点に本研究成果の学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to empirically and theoretically clarify the linguistic processes of "experience" and "knowledge" with regard to the various constructions characteristic of Japanese and German, which reflect "experience" and "knowledge" respectively, and to construct a basic study of the "functional typology of experience and knowledge".

In 2018, a corpus-based database was created and analyzed, and those results were published as "Grammatik der Bedeutungsstiftung" in 2019. Although COVID-19 disaster caused postponement of conference presentations, in 2020 we published papers entitled "Principles of Semantic Assignment" and "Recursive Syntax Reconsidered" and gave an oral presentation at the Japanische Gesellschaft für Germanistik.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：体験 知識 ドイツ語 日本語 機能類型

## 1. 研究開始当初の背景

言語が一方でなんらかの出来事を表し、他方でなんらかの属性を表すことはよく知られている (Ehlich, Redder, 影山)。例えば、ドイツ語において虚辞 *es* (英語の *it* に対応する) の出没がこの上記の差異を反映している。

これを具体的に言うと、ドイツ語においては、*Mir ist kalt* (To me is cold; 私は寒い) という出来事を表す場合は *es* が現れず、*In Berlin ist es im Winter recht kalt* (In Berlin is it in winter very cold; ベルリンの冬はほんとに寒いという、属性を表す場合は *es* が義務的に表現されなければならない。また、日本語においては、形容詞の活用において、その差異が見られる。例えば、「病気の人」という出来事を表す場合は、の格が通常であるのに対して、「健康な人」という属性を表す場合は、な格が必須となる。「病気な人」、「健康の人」とは言えないのである。本研究は、こういった出来事と属性の差異への関心に端を発している。

## 2. 研究の目的

本研究では、この二つの言語特徴が日本語とドイツ語でどのように表現されているかを追求するのを目的とした。その際、Georg von der Gabelentz による言語の類型的視点に立脚した。彼は言語について、以下のように言っているのである。「Du hast diese Eigenschaft. Sie entwickelt in ein und anderen Eigenschaften. Diese wiederum bilden deine gesamten Charakter. So wie ein kühner Botaniker es versucht hat, aus einem Lindenblatt ihren gesamten Baum zu rekonstruieren. (言語よ、お前は、こういう特性を持っている。それは、あれやこれやの特性と通じている。これらはまた、お前の全体像を形成している。それはちょうど、果敢な植物学者が一枚の菩提樹の葉からその木全体を再構築することを試みたのと同様である)」。また、この von der Gabelentz の言語観は、Chomsky の一般言語学の理論を先取りしており、他方で、個別の言語研究の意義を明確にしている。本研究はそれらの理論的背景を模索するものであり、日独語を対象として、これらの理論のさらなる実質化、および統合化を目指したものである。

## 3. 研究の方法

上記のことを実現するために、まずは、コーパスによるデータベース化を行った。日本語に関しては、『話し言葉コーパス』(国立国語研究所)をデータベース化し、またドイツ語に関してはマンハイムのドイツ語研究所「Institut fuer deutsche Sprache」の提供する「Limas Korps」のデータを分析した。これらの経験的事例に基づき、それぞれの言語単位、つまり、語、文、用法、さらには語用に関して、出来事と属性がどのように顕現するかを調査した。またそれらすべての底流をなす意味付与の原理を探った。そこから得られた仮説は、意味付与に関して規定力を持つのは、言語形式ではなく、むしろ言語使用者なのではないかということである。具体例を言えば、「Das Auto ist zu reparieren. The car is to be repaired. その車は直されねばならない。または、その車は直すことが可能だ。」において、受動の意味、加えて可能あるいは強制の意味を付与するのは、言語形式ではなく、言語使用者にほかならないのである。

## 4. 研究成果

具体的には、上記の研究成果として、2019 年度にドイツの言語学の専門出版社である Staufenburg 社から、『Grammatik der Bedeutungsstiftung (意味付与の文法)』を単著として刊行した。また、2020 年度においては、『意味付与の原理』と題した論文を、「KG ゲルマニスティク」(関西学院大学文学部ドイツ文学・ドイツ語学専修の紀要)に発表した。また同年、吉田光演退官記念論文集(ひつじ書房)に『再帰構文再

考』と題する論文を発表した。そのほかに、2020年に、日本独文学会において開催されたシンポジウムに、パネラーとして参画し、「ステージレベルとインディビジュアルレベルの述語」と題した口頭発表を行った。日本語、独語に関する体験と知識の体系から、言語類型を明らかにすることができたといえる。具体的に言うと、ドイツ語の与格構文とそれに機能的に対応する日本語の二重主語構文、被害受身文が主として体験に属し、それに対して、ドイツ語の中間構文(middle construction)と日本語の属性を表す構文が知識に対応することが分かったことによる。

今後の研究方針としては、コロナ禍で制約を受けた日独の研究者との連携を再構築することによって、研究環境を整備し直す予定である。とりわけ、次のような研究者たち、ベルリン自由大学の Eckkehard Koenig (言語類型論)、ライス大学の柴谷方良 (言語類型論)、慶応大学の田中 慎 (ドイツ語学・日独対照言語学)、東京外国語大学の藤縄康弘 (ドイツ語学・日独対照言語学) たちとの連携を再構築する。それにより、言語類型論と対照言語の二つの分野にまたがる知見から、人間言語のありように対して洞察を深める。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小川暁夫	4. 巻 21・22合併号
2. 論文標題 意味付与の原理 ドイツ語を例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 KGゲルマニスティック	6. 最初と最後の頁 41 - 55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中 雅敏、筒井 友弥、橋本 将	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 学際的科学としての言語学研究	

1. 著者名 Akio Ogawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Stauffenburg	5. 総ページ数 198
3. 書名 Grammatik der Bedeutungsstiftung	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------